
とある中二の製作自在(I c e Maker)

どらごん 5 6 4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある中二の製作自在（IceMaker）

【Nコード】

N8719Y

【作者名】

どらごん564

【あらすじ】

右手に幻想殺し（イマジンプレイカー）と呼ばれる、異能の力を宿した少年、上条当麻には痛々しい中二病な双子の兄が居た。

かみじょうカルマ
名は上条駆麻。

アイスメーカー
その左手には、製作創造と呼ばれる能力が宿っていた。

作り出したものを「オリジナル」と同じように扱えるが、そのかわりに制約がないわけでもない、そのチカラ。

氷細工に中二病患者が目覚める時、物語は大きく動き出す！

（*とある炎の獄炎魔王（Iblis）の改訂版です。内容は十分

変わりますが。
)

上条当麻の双子の兄

「この駭^{カルマ}麻さんの為に莓ミルクを買おうなんていう、猛者は居ないのだろうか？」

学校の廊下にて。

銀髪で青灰色の目を持つ、半袖の夏服の下に半袖の薄いカエルがプリントされたパーカーを着た少年、上条駭^{かみじょうカルマ}麻は、月一回の身体検査^{システムスキャン}を受けるべく、自らが通う高校の廊下に立っていた。

能力開発を主とする学園都市では、能力の稀少さや能力の強弱で評価^{評価}されてしまう。

しかし、時間割り^{カリキュラム}をいかに真面目にこなそうと、駭^{カルマ}麻は能力に目覚めることはなかった。

弟は現在、最近何故か銀髪シスターさんと外出することが多い。

しかし、現在、補修中である（警備員の黄泉川監修の下）。

駭^{カルマ}麻としては、羨ましくて仕方がない、

弟の上条とともに、駭^{レベル0}麻は無能力者だが、弟の右手には『異能の力』

が宿っている。
イマジネレイカー
幻想殺し。

その右手に触れたものが『異能』ならば、『神様の奇跡』ですら打ち消してしまうという。体力面や精神面^{メンタル}、勉強面では、当麻は『兄ちゃんには負けるよ』と言っていた。だけど、それだけで満足する自分ではなかった。

満足するわけにはいかないのだ。

その衝動がなんなのか、自分ではよく分からないケド。

かくいう、駭^{カルマ}麻もまた奇妙な能力を持っている。
アイスメーカー
製作自在。

水分さえあれば、いかなるものであると作り上げてしまう、駭^{カルマ}麻の左手に宿る能力である。作り出されたものは、本物のように機能

するが、ソレが翼のような身体につけたりする付属品であれば強い衝撃を受けると、簡単に砕けてしまう（武器のように使えるものであれば、『モデル』と同じように機能する。例：剣ならば、左手だけでなく右手も使って、両手で持つことも可）。両手を地面に押し付けたり、本来の氷の性質たるモノを『凍らせたり』すること可能。ただし、一年中いや、このまま一生冷え性に悩んでしまうことをも意味する。

「よー、カルヤん。システムスキャン身体検査にや？」

サングラスに制服の下から覗くアロハシャツ。

彼の名は土御門元春。つちみかどもとほる

駈麻と上条の寮の部屋の隣人である。カルマ

呆れかえるほど、義妹の土御門舞夏を溺愛している。つちみかどまいか

義妹が熱が出た、というだけで慌てふためくほどだ。

「ふっふっふ……。本日を持って、俺は能力に目覚めるはずだ。明日から、夏休み。この夏休みは、この夏休みこそ！カルマさんは能力に目覚める！」

「おいおい……。そんなこといって、先月も無能力判定出たにやー？自信過剰なこととは言わないほどが身の為だぜい、カルヤん」レベル0

熱くなっている駈麻カルマを見て、土御門は呆れるようにしてため息をついた。

「カルマちゃん、用意できましたですー」

舌足らずな口調に、見た目12歳でランドセルが似合いそうな少女のような人物は駈麻に声をかけた。

彼女は、月読小萌。つくよみこもえ

これでも立派な社会人で、『出来が悪い生徒ほど、面倒を見る』と言った教師の鑑のような人物で、どんなに出来が悪い生徒でも決して見離すことがない。そのため、生徒達には慕われているのだ。何故か、双子で同じクラスな双子の上条兄弟（理由としては、外見が似ておらず、区別が付きやすいからに違いない、というのが二人が至った答えだ）のクラスの担任である。

小萌はどうやら、システムスキャン身体検査の用意が出来たらしく、システムスキャン身体検査をする部屋から顔をひよっこり覗かせた。
低身長ゆえ、よく見えない。

「へーい、今行きまーす。土御門、思い知るがいい。俺は・・・、俺は・・・、ついに能力に目覚めるのだっ！」

「ハイハイ。カルヤんの中二病末期症状には、恐れ入りましたニヤ。もう、カルヤんには付き合いきれないニヤー」

土御門は肩をすくめて、頭の後ろで腕を組み、わざと場を後にした振りをする。駄麻は、呼び止めることもなくシステムスキャン身体検査を行なう教室へと入った。

（・・・って、呼び止めないのかニヤ！？つくづく、恐ろしい奴ニヤ。カミヤんと違って、ある意味。）

呆れつつも、土御門は廊下で駄麻カルマを待つことにした。

システムスキャン身体検査室にて。

「あ、カルマちゃん、来ましたですー？」

小萌は、持っていた資料を整理していた。自分より背の高い駈麻カルマを見つけると、「こつちですー」とヒョコヒョコしていた。我が担任ながらも、どうしても12歳の小学生にしか見えず、とても可愛らしく見えた！と、駈麻カルマは見蕩れてしまっていた。

小萌は、ボーっと床に座りこけている駈麻カルマの頬を突き、「カルマちゃーん？大丈夫なのですー？」と心配そうに顔を覗き込んでいた。

「・・・ハッ！アリアグ〓シュナイダーが俺の中に！？」

「・・・だから、なんですー？アリアグ〓シュナイダーって」

ハッとして、顔を上げた駈麻カルマの突然の一言。
どうやら、小萌もソレを理解しているらしい。

「あつ、こうしちゃいられないですー。ほら、カルマちゃん、行きますですー？」

「どこに？」

立ち上がり、隠し切れない欠伸を隠しつつも、駈麻カルマは疑問に満ちた表情を浮かべる。

いつもなら、自分が身体検査を受けるときは決まって室内。
システムスキャン

なのに、何故、いきなり？

駈麻カルマは自分なりに結論を出した。

「・・・それって、わたくし上条駈麻カミシヨウカルマが実はとてつもなくスゴイ伝説の勇者だから、ただちに調べよ、とカノッサ機関からの要請？」

小萌は少しガツカリした。

駈麻カルマが妙に真面目に話し出すから何事かと思えば、いつもと変わら

ない調子。

小萌は知っている。いかに、^{カルマ}駆麻が日常的に「^{チカラ}能力が欲しい」と言っていて、教え子である、青髪ピアス、^{カルマ}駆麻の弟・上条当麻、土御門元春にボコボコにされつつも（じゃれあい。）、ソレを呟き続けていた理由を。

「小萌先生が専門で教えている^{バイロキネシス}発火能力に、何故、教わっている俺は目覚めないんだ！」という、台詞を小萌は廊下で聞いたことがある。

はじめて、小萌は感動してしまった。^{カルマ}駆麻の発言に。
しかし、コレには裏がある。

単純に、「氷に火をぶつけたら溶けるんじゃないか？つまり、冷え性克服！」・・・という、安易な発想ゆえ、^{バイロキネシス}発火能力を求めているのである。

つまり、馬鹿である。

「カルマちゃん、今回こそは能力に目覚めるといいですね！」

「は、ハイ！」

小萌が目には涙を浮かべていたので、^{カルマ}駆麻は焦った。

小萌を泣かすと、青髪ピアスに制裁を喰らってしまうのだ。

だが、この場合、^{カルマ}駆麻が発した言葉を小萌は思い出して泣きかけているのだ。

つまり、^{カルマ}駆麻が悪い。

小萌がスタスタとプールに歩いていくのを呆然と眺めていると、^{カルマ}駆麻は思い出したかのようにまたもや、焦って付いて行った。

プールにて。

真夏の日差しでキラキラと水面が光っている中、ジーっと^{カルマ}駆麻は水面を見つめてた。

一向に何もする気配がない駆麻を土御門は動向を窺うばかりだ
小萌は、上条とマンツーマンの補習を見なくてはいけない為（小萌が自主的にしている）、此处にはいない。
代わりに、先ほどまで補習の監督をしていた黄泉川愛穂が代理でここに居る。

「ほら、上条兄。かみじょうあに なんか、してみるじゃん。」

「なんかしてみろって言われてもなあ・・・、なんかあるかなー。」

「カルヤン、凍らせるの得意だろニヤ？とりあえず、やってみたらいいと思うぜい」

「上条兄、凍らせれるのかじゃん？」

「まあ、はい。」

「だいぶ、夏に役立つ能力じゃん。まあ、見せてみるじゃん」

能力を測定する為の機器が並べられる中、駆麻はプールサイドでしやがみ、左手を水面に翳す。

駆麻は水面に翳している左手に意識を集中させる。

そして、想像する。

水面が全て完全に隙間なく凍っているその様子を。
Et bannace
永久凍土のように。

ピキ。

ピキピキ。

ピキピキピキ。

ピキピキピキピキ

ピキピキピキピキピキピキピキピキピキピキピキ。

プールは氷で完全に覆われた。

機械が測定したレベルは――0。

「うぎゃああああああ！またか！またですか！・・・いや、これもまた試練なんだ！」

測定器の横で叫ぶ、カエルをモチーフにしたパーカーの少年。

「土御門、アイツはどうしたんじゃん？」

「気にはしていないぜい、先生。いつものことですニヤ。」

不思議そうな目でその様子を見るジャージ姿の女教師と、呆れて何もいえない、その友人たるアロハシャツの少年。

カエルパーカーの銀髪少年は、この後奢らされてしまったのは言うまでもない。

不可価値ラブソディ

「あー、畜生。土御門め、わざと高いヤツ選びやがってエ・・・」

左手をグー、パーすると小さな氷の塊が姿を現した。

そして、勢いよく壁に投げつける——筈だった。

「オイ、どこ見て投げてんだア・・・？」

後ろからかけられる、不良の不機嫌そうな声。

その声を聞いて、カルマ 駆麻は直感する。

ああ、またかア・・・と。

やれ、やっちまえ！と後ろから声がするのがすぐ聞こえるより早く、カルマ 駆麻は走り出していた。

路面を滑らせることが出来る、能力を持っているのを忘れてしまうほどに。

すぐさま、不良に囲まれた。

まわりにいるのは、レベル3 強能力者が数名と言ったところだろうか。
パイロキネシス 発火能力が何故が多かった。

一斉に不良たちが手を構え、ニヤリと笑い、右手に炎を灯す。
アイスメイカー

製作創造ならば路面を氷結させ、逃走することも可能だ。

だが、それが出来ない理由がある。

それは、気分が落ち込んでいるからだ。
アイスメイカー

製作創造を上手く使いこなすには創造力と精神力が必要とされる。
アイスメイカー 気分が落ち込んでいると、製作創造を使用することはまず無理だ。

「クソガキ、覚悟しろよオ・・・？」

スキンヘッドでスカジャンを着た男が他のパイロキネシス 発火能力者の不良を従え、近づいてくる。

左手を構えるも、氷が出てこない。
何度振ろうと、何度振り回そうと。

「どうした？出ねえのか？まあ、見た限りでは無能力者^{レベル0}っぽいなあ
！そりゃ、仕方ねえか！」

スキンヘッドの男は嬉しそうに笑う。

まるで、獲物を見つけたライオンのように。

炎をゆらゆらとさせ、一歩ずつ近づき、左手を伸ばし、^{カルマ}駆麻の首を
掴む。

そして、右手を近づける。

思わず、^{カルマ}駆麻は眼を閉じた。

ああ、これで俺の憂鬱しかねえ人生終わるのかなー、^{エターナル・プリザード}最終奥義完成
できずに終わるのかなー、なんて考えつつも。

しかし、終わりはやってこない。

一体、どうしたんだろうと思って眼を開けて、振り返ると――

――そこら一帯は紅く染まっていた。

まるで、何かに切り捨てられたかのように。

少し路地の奥を見ると、そこには紛れもなく、^{せきはつ}赤髪のロングスト
ートで、片目を髪で隠している、服装は丈の短い真つ黒なセーラー
服にタイトスカートと言った出で立ちで、^{アマソネス}女戦士を思わせるどこか
荒々しい雰囲気放つ、変なカタチのヘアピンをつけた長身の女が
立っていた。

こちらの視線を感じると赤髪の女は、

「お前、絡まれてたのかさ？」

と、声をかけてきた。

見たところ、女が刃物を持っている様子は見られない。

どこかに隠し持っているのだろうか？

だが、それでも隠し切ることは不可能だ。

不良の傷は見た感じでは、かなり深い。

ここまで学園都市の能力者で出来るといえば、「風力使い」エアロユーターが第一に思い浮かぶ。

「風力使い」エアロマスターならば、風で刃を生み出すことも出来ないわけじゃない。

レベルが高ければ、可能である。

「（まさかの沖縄弁！？）まあ、そんなところかな。」

「とりあえず、また会おうさ。銀髪少年」

何が何だか分からないまま、女は走り去っていった。
すると、その後から武装した警備員アンチスキルがやってきた。

「おい、君。『ベリアル・ワースレス』が通らなかったか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8719y/>

とある中二の製作自在(I c e Maker)

2011年11月27日06時52分発行